

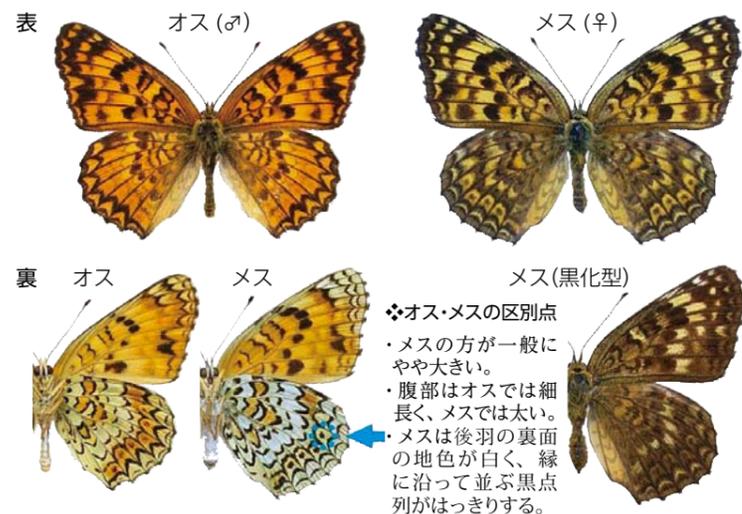
ともに生きてきた。 そして、これからも

里山や生物多様性、近年、こうした言葉をよく耳にするようになりました。人にさまざまな恩恵を与えてくれる自然環境。私たちは身近な自然を大切にしていける必要があります。「ヒョウモンモドキ」というチョウを知っていますか？日本でも、最も絶滅の恐れのあるこのチョウが、国内で三原市と世羅町にだけ生き残っています。このチョウが、いつまでも生き続けられるようにとの思いを込めて、三原市と世羅町の共同でヒョウモンモドキの特集を企画しました。



第1編 ヒョウモンモドキってどんなチョウ？

ヒョウモンモドキは、モンシロチョウよりやや大きく、羽を広げた大きさが5cmほどで、明るいだいたい色のヒョウ柄模様のチョウです。湿った草原(湿地)に生えるキセルアザミやタムラソウを幼虫が食べ、成虫はノアザミなどの蜜を吸います。成虫の多くは、湿地やその周囲をゆるやかに飛翔し、ノアザミなどの花にとまっています。



月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
卵												
幼虫												
サナギ												
成虫												

▲ヒョウモンモドキの生活史



第2編 ヒョウモンモドキの一生

問い合わせ先

インタビュー

ふるさとへ帰り保護活動



朝野隆治さん (久井町)

約3年半前、兵庫県からふるさとである久井町へ帰ってきました。帰ってきてから、自分の所有地にヒョウモンモドキが以前生息していたことを知りました。保護の会の会員となり、生息地を再生するため、アザミを植えたり、草刈りをしたりしています。ヒョウモンモドキをはじめ、多様な生物がいなくなっていくのは寂しいことです。里山を守っていききたいと思います。



▲草刈りのようす

「どんな形で表現すればよいのか分からないが、楽しさや魅力を多くの人たちに感じてもらいたい」と語るのは、同会会長の井藤文男さん。額に汗して草を刈ることもまた楽しい、と笑顔で話します。保護活動のポイントは、「農業の基本に返ること」と教えてくれました。今後は、今年3月に設立したヒョウモンモドキ保全地域協議会の賛同団体として保護活動を行なっていきます。苦勞しながらも活動を続け、ヒョウモンモドキの保護につながると考えればいろいろなことにチャレンジする柔軟な取り組みが、ヒョウモンモドキの生息を大きく支えています。

事務局の皆さん(左から、井藤会長、猪谷さん、須内さん、桜井さん、岩見さん)
ヒョウモンモドキ保護の会事務局
須内さん
☎0847・33・0931



第5編

ヒョウモンモドキを守れ!

保護活動の先駆け

1990年代に急激に減少したヒョウモンモドキに対し、いち早く保護活動を展開したのが、平成13年6月に設立されたヒョウモンモドキ保護の会です。

県外からも活動に参加

活動内容は大きく4つに分けられます。①調査研究②生息地の維持・管理③観察会・勉強会④広報活動です。現在会員は約90人。会員の中には県外の人も含まれています。例年、春と

チャレンジし続ける

秋に草刈りを実施し、産卵場所であり幼虫の餌となるキセルアザミの繁殖地を確保し、チョウの吸蜜花であるノアザミを植栽するなど、ヒョウモンモドキの生息地を維持・管理しています。また、里山の貴重さや心地よさを感じてほしいと、毎年、自然観察会を開催しています。今年も6月に開催し、家族連れなどが、優雅に舞うヒョウモンモドキの姿や、その他の湿地に住む希少な生き物を目にしました。



ヒョウモンモドキは、かつて、福島県から山口県までの14の県に分布していました。その分布は、大きく分けて長野県や山梨県を中心とした本州の中部と、広島県や岡山県を中心とした西日本の2つのエリアでした。しかし、本州中部では1990年代前半の記録を最後に、西日本では広島県を除いて、1999年の記録を最後に絶滅しました。広島県内でも、1980年代ごろまでは多くの市町村で見られましたが、次々に絶滅し、2012年現在、生息が確認されているのは、三原市と世羅町のみとなってしまいました。ヒョウモンモドキは、旧市町村単位での減少率が全国で約98%と、日本で見られるチョウ約240種の中で最も高く、現在国内で最も絶滅の危険性の高いチョウとなっています。そのため、環境省と広島県のレッドデータブックで、絶滅の危機に瀕している種である「絶滅危惧1類」に指定されています。さらに、昨年4月には、環境省により「国内希少野生動植物種」(右下)参照)に指定され、捕獲や殺傷、販売や譲渡などの行為が禁止されました。

第4編

絶滅に陥った原因は?

生息地の減少

ヒョウモンモドキは、キセルアザミやタムラソウ、ノアザミといった餌となる植物が生える湿地や休耕田、農地周辺の草地に生息します。しかし、この数十年の間に、人のくらしや農業の仕方が変化することによって減少していききました。

観光地や農地、宅地などへの大規模な開発が進められ、湿地が埋め立てられていきました。また、農地を整備する事業(ほ場整備)などにより生息地が影響を受けました。これらにより、生

捕獲

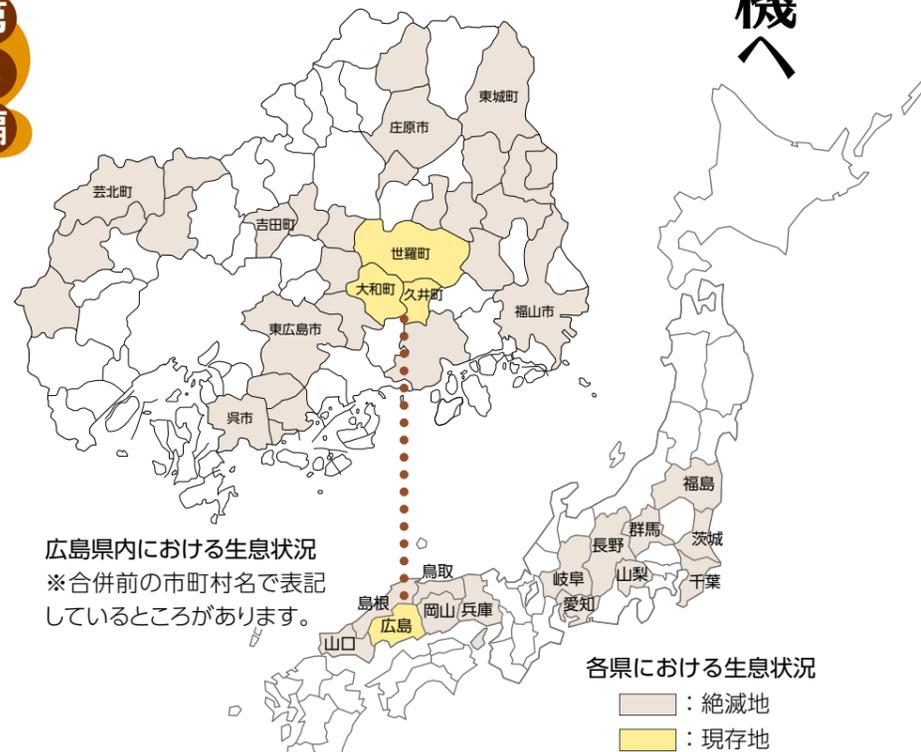
個体数が少なくなった中で過度の採集が行われたことが、減少に拍車をかけました。



▲チョウの蜜源となるノアザミが減少してしまいました

第3編

絶滅の危機へ



広島県内における生息状況
※合併前の市町村名で表記しているところがあります。

各県における生息状況
■：絶滅地
■：現存地



国内希少野生動植物種とは

絶滅のおそれのある野生動植物の中で、特に保護の優先順位が高いものとして国が指定したものを。鳥類、昆虫類、哺乳類、植物など90種が指定されている(平成24年4月現在)。

指定を受けている種の例

コウノトリ、トキ、ハヤブサ、タンチョウ、ヤンバルクイナ、シマフクロウ、イリオモテヤマネコ、スイゲンゼニタナゴなど

お問い合わせ先

番外編

エヒメアヤメ



※沼田西の自生南限地帯が、国から天然記念物として指定。環境省：絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種）

オグラコウホネ



環境省：絶滅危惧Ⅱ類

ハクセンシオマネキ



環境省：絶滅危惧Ⅱ類

ナメクジウオ



※有竜島（幸崎沖）付近の生息地が、国から天然記念物として指定。水産庁：危急種（絶滅の危険が増大している種）

ハッチョウトンボ



広島県：絶滅危惧Ⅱ類

三原市に生息するその他の希少動植物

生活環境課

☎0848・67・6194

今年3月、広島県や三原市、世羅町、学識経験者、地域住民の代表など14人の役員からなるヒョウモンモドキ保全地域協議会が設立されました。その最大の役割は、保護活動全体の舵取りと調整です。協議会では、中長期にわたる活動が計画されています。

保護活動を強力に推進



協議会として今後どのような保護活動に取り組みたいですか？
生息地の保全と改善、新たな生息地の創出などに取り組みます。そして3

理由は3つ考えられます。①他の地域よりも、生息に適した湿地が多かったこと、②ヒョウモンモドキ保護の会が、早くから保護活動に取り組んできたこと、③三原・世羅に生きる人たちが、自然と穏やかな付き合い方をしてきたのではないかと考えています。

また、20年後、30年後という将来を見据えた場合、次世代の保護の担い手である子どもたちの心を育てたいとも思っています。保護活動が持続していくことの一つの鍵は、子どもたちが、ヒョウモンモドキをはじめとする生物多様性のすばらしさを理解し、そこに住んでいるという誇りを感じてくれることにあると考えています。

今、私たちがしなければならぬことは、ヒョウモンモドキを絶滅種にするかしないかは、三原・世羅に住んでいる人たちの知性や英知にかかっていると言っても過言ではないと思っています。

これまで、ヒョウモンモドキを保護するための学習会や生息地の環境整備、自然観察会などに取り組んできました。環境の大切さや久井地域の里山・生き物の魅力を伝える活動が進められています。



くい環境会議 代表 小島照行 さん

素晴らしい場所に
住んでいるという自信を

インタビュー

長年にわたって、人間と自然が関わり合い出来上がった里山。その良さを感じてもらおうとともに、素晴らしい場所に住んでいるという自信を持ってもらいたいです。ヒョウモンモドキは、その素晴らしさの象徴だと思っています。

学習会や観察会を実施

水辺環境の見直しをテーマに活動を展開しているくい環境会議。地域内にある渓谷の環境整備やホタルマップの作成などに加えて、ヒョウモンモドキの保護活動にも取り組んでいます。平成18年に、みはらし環境塾の久井地域としてスタートし、平成20年に、くい環境会議として組織が整備されました。



▲学習会と草刈りのようす



国土交通大臣から表彰

これまでの取り組みが評価され、今年5月に国土交通省から、「まちづくり月間まちづくり功労者国土交通大臣表彰」が贈られました。

くい環境会議

☎0847・32・6073

せら夢公園



飼育繁殖で種を確保

せら夢公園敷地内にある自然観察園で、ヒョウモンモドキの飼育繁殖が行われています。絶



せら夢公園 自然観察園主任 猪谷信忠 さん

滅地への復元に利用するため、園内に2棟建てたネットハウスの中で、平成22年からヒョウモンモドキを飼育し繁殖させています。「生態系のバランスを壊すことのないよう慎重に作業をしています」と語る猪谷さん。同園では、湿地やため池に住む希少な動植物の観察会を定期的で開催しており、例年6月ごろには、ヒョウモンモドキの飼育のようすも見学することができます（見学はハウスの外側から）。



せら夢公園自然観察園

☎0847・25・4400

ヒョウモンモドキを保護することができるのは、そこに住む人たちだけなのです。これを学習素材として扱えるのも、この場所だけの特権ともいえます。ほんの少しずつの保護活動へ理解が、大きな動きにつながるはずですよ。

ヒョウモンモドキの保護ができるのは、
そこに住んでいる人たちだけ

【プロフィール】さかもと みつる（広島市昆虫館 学芸員）
東京都出身、51歳。愛媛大学農学部修士課程修了。平成元年、昆虫館職員となり、広島県の昆虫相の解明と希少昆虫類に関する調査、保護活動に取り組む。今年からミヤジマトンボ保護管理連絡協議会、ヒョウモンモドキ保全地域協議会の会長に就任。7月には、ミヤジマトンボが生息する宮島（廿日市市）の沿岸地域の一部が、国際的に重要としてラムサール条約の登録湿地となった。

ヒョウモンモドキ
保全地域協議会
会長
坂本 充 さん

子どもたちの声 Voice



見学会に参加して

久井小3年 宗行紗弥さん
初めて見たヒョウモンモドキは思ったより小さかったです。久井にずっと生き続けてほしいです。



劇に向けて

久井小5年 石原侑菜さん
ヒョウモンモドキや貴重な生き物がある久井町に住んでいて幸せだと思います。地域の人たちへ感謝の気持ちを伝えたいです。



神田東小3年 越水麻央さん
地域の人たちの頑張りがあったから、今もヒョウモンモドキが生き残っているということを伝えたいです。いつまでも生き続けてほしいです。



神田東小4年 新谷駿仁さん
ヒョウモンモドキの生息地を、みんなで協力して守っていきたいです。貴重なチョウであることをみんなに知らせたいです。

● 神田東小学校
今月予定している学習発表会で、ヒョウモンモドキをはじめとした、「上徳良地域の宝」について劇で演じることにしています。
先月13日、事前準備として、ヒョウモンモドキ保護の会の須内美穂子さんを講師に、学習会が行われました。平成16年に当時の3、4年生が、ヒョウモンモドキを幼虫から育てたようすを記録したビデオを鑑賞し、その生態などについて改めて学んだ子どもたち。地域から無くなるうとしていた宝。それを守るために多くの地域の人たちが関わっていることを知りました。豊



▲真剣に学ぶ子どもたち

かな自然に包まれて、大きく成長した子どもたちが、地域の皆さんや家族に劇を贈ります。

か弱くも優雅に舞うヒョウモンモドキ。このチョウの姿を見ることができると、日本では、ここ三原市と世羅町のみとなってしまいました。
生息を支えているのは、地域の大きな力です。その力は、少しずつですが確実に次世代へと受け継がれています。今できることを懸命に考え、表現しようとしている子どもたち。地域の人たちが残してくれた宝が、郷土愛や郷土への誇りを育んでいます。
取材協力・写真提供
日本チョウ類保全協会(第1〜4編作成協力)
ヒョウモンモドキ保護の会
せら夢公園
広島市昆虫館

劇で演じる保護活動

地域の皆さんの保護活動を目的とした子どもたちが、ヒョウモンモドキについての劇を行う予定にしています。
いずれも今年度をもって閉校となる久井小学校と神田東小学校の取り組みを紹介します。

● 久井小学校

「ヒョウモンモドキとわたしたち」をテーマに、地域の人たちに伝えたい思いを5年生18人が台本にまとめる作業を行なっています。出来上がった台本をもとに、1、4年生57人が、劇で演じます。

同小では、6月に広島市昆虫館の坂本さんを講師に招き、事前学習を行いました。この学習では、ヒョウモンモドキはどのようなチョウで、どんな人たちが保護活動をしているのかなどを学んだ後、現地の見学を行いました。見学では、実際にヒョウモンモドキの舞う姿を確認することができ、子どもたちの歓声が上がりました。



▲劇に向け台本作りが進んでいます

こうして学んだことや感じたことをまとめる作業が進んでいます。指導する平賀智明教諭は「久井の地に住んでいることの素晴らしいさを子どもたちに感じてほしいです。そして、ふるさとを守っていくという気持ちを育てていければ」と語ります。
来年2月に行う閉校行事。参加を予定する多くの地域の皆さんに思いを伝えるために上演する劇。閉校は終わりではなく、新しいスタートと位置付け、それぞれの思いをつなぐ取り組みが行われています。

最終編

つながる郷土愛

コラム

多様な生物が生息する里山を守っていく活動や学習素材として活用する取り組みが行われています。

南方小でオオムラサキの保護活動

7月5日、南方小の6年生18人が、学校近くの森で竹を伐採しました。目的は、絶滅危惧種のオオムラサキの保護です。密生する竹を切り、幼虫が食べるエノキを救いたい。広島市昆虫館の坂本さんと、森の再生と自然保護を図るために活動をしている、もりメイト倶楽部 Hiroshima の指導により5年も続くこの活動。
竹の除伐により、オオムラサキが舞い、多様な生物がくらす雑木林がよみがえります。参加した井上雄次郎さんは「太い竹を切るの大変だったけど、楽しかったです。他の木にも太陽の光が当たるようになってよかったです」と息を弾ませていました。



▲悪戦苦闘しながら竹を切る南方小の子どもたち



▲元気にはしゃぐ子どもたちの声がこだましました(中之町学校林)

中之町学校林で自然塾

8月6日、中之町学校林に流れる小川で遊ぶ体験学習が行われ、中之町幼稚園に通う園児らが参加しました。里山学校子ども自然塾と題したこの行事は、市内で里山の保護や再生などに取り組んでいるNPO法人「フォレストサポートクラブ」の指導により行われました。
林の中を流れる小川で魚をすくって楽しむ子どもたち。普段ではできない体験に目を輝かせていました。指導した同クラブの新居康男さんは「自然を大切にしようという気持ちを育んでもらえたら」と、こやかに語りました。

